

遠州灘の海鳴り伝承の実態報告

波小僧伝承調査から

Report on the Actual State of the Sea Rumbling Tradition
in the Sea of Enshu-Nada
Research on the folklore of Nami-Kozo

兼古勝史(放送大学)
Katsushi KANEKO

(要旨)

遠州灘の波小僧伝承について、その実相を明らかにするために、元となった海鳴り現象の可聴エリアの現状や記憶に関する調査を市民と協働で実施した。観察、聞き取り、投稿情報公開募集などにより、海鳴りが、海岸から10km圏内や、20km以上内陸の地域にも届いていたことが確かめられた。また浜松市内の小中学校校歌の歌詞の調査から、多くの地点で波音が聞かれ、その聞こえ方が海との距離で異なっていた可能性が示唆された。市民との協働を含む波小僧調査は、市民が環境への気づきを得て、海との関係性の再構築へとつながるという意味で、サウンドエデュケーション的側面を持っている。

(キーワード)

波小僧、遠州灘、海鳴り、校歌、風景

1. はじめに

(1) 波をよろこぶ

青いうねり 波のうねり
生きてるやうに 寄って来て
平な濱に 真白な布をしく
かもめがとんで 海はのどか

をどるをどる 波がをどる
生きてるやうに 寄せて来て
きりたつ岩に 散る波は瀧のやう
かもめが鳴いて 海は叫ぶ

これは、昭和7年に刊行された『新訂尋常小学唱歌』（文部省、1932）尋常科三年の教科書に掲載されている唱歌「波」の歌詞である。作詞作曲者は不詳であるが、波が浜辺に打ち寄せる情景が平易な歌詞に歌い込まれている。特に第2節（2番）の最後で波の音風景にも言及しているところが興味深い。昭和8年出版の解説書『新訂尋常小学唱歌の解説と其取扱 〔尋三〕』（井上、1933）によると、この曲の「歌詞の解説」として「季節に連關し

て海濱に打よせる波の面白さを表現した歌詞」「夏の教材として好適」（同書、p. 245）とあり、「授業要旨」の項には、「海岸の状態によって波の情趣の異つて居る面白さを表現したこの歌曲を授けて海を愛し波をよろこぶ心を養ひ」と記されている。「海を愛し波をよろこぶ心」とはどのようなものか。それは、観念的、徳目的なことではなく、子どもの頃からの海との関係性の中で培われるものであろう。この歌のような情景は、かつては日本の海岸線の至る所で見られたはずで、この歌が教材として採用されたのは、当時の（少なくとも沿岸部の）子どもたちにとってこの歌詞が、日常の（或いは夏休みの）風景として共感できる内容だったからに違いない。こうした歌の中には、往時の風景や、環境への意識が込められているのだと言える。

世界第6位の長さの海岸線を持つ我が国の沿岸の住民は昔から海辺の風景に親しみ、波との関係性を紡ぎながら暮らして来た。

戦後の高度成長期を経て、海岸の埋め立て、沿岸漁業の衰退、堤防の建設などによ

り、昔ながらの海辺の風景と暮らしが失われ、海との関わりが希薄になりつつある中にあって、波音に耳を澄ました暮らしの記憶を今に伝える地域がある。

(2)遠州灘の海鳴り・波小僧伝承

静岡県西部、遠州灘と言われる地域もその一つだ。遠州灘は静岡県御前崎から愛知県伊良湖岬まで続く海域で、110Kmに及ぶ海岸は砂丘が広がる砂浜である。この地域に伝えられているのが遠州七不思議の一つ「波の音」あるいは「波小僧」と呼ばれる伝承だ。

遠州七不思議の一つ「波の音」とは、海鳴りの聞こえ方、とりわけその方位によって天候の変化を予測する観天望気のことである。地域によって若干違いはあるが、その内容はおおよそ「波音が東（東南）から聞こえると雨、西（西南）から聞こえると晴れ」というものだ。そして、この「波の音」現象が起こる由縁として語られるのが「波小僧」伝承である。波小僧伝承にはいくつかのバリエーションがある。代表的なものは「漁師の網にひっかかった（一説には、大雨で田んぼに取り残され帰れなくなった）波小僧を、海へ帰してやったお礼に、波小僧が天候の変化を海鳴りで知らせるようになった。」というものである。また内陸地方では「僧侶や農民がつくった藁人形が川から海に流れ、波音で天候を知らせる」といった話も多く存在する¹。江戸時代に編纂された『遠江古蹟図会』（兵藤（藤）、1803）には、「海の鳴」として「海の鳴事も当国ばかりと云海中に海坊主住故に波の音高しと云」との記述が見られる。

波音による観天望気の伝承は、遠州以外の他の地域でも見られる。しかし、遠州灘の伝承は、その語られていた範囲が海岸から遠く離れた内陸部までも及ぶこと、海鳴りの原因を「波小僧」という擬人化された妖怪や藁人形等に求める物語が存在しているという点で特筆すべきものとなっている。

(3)本研究の目的と経緯

遠州地方では、昔から「雷三里、波七里」²などと言われるように海鳴りが内陸奥深くまで聞こえたという。一里はおおよそ3.9kmとされるから、現代の単位に換算すれば27～28kmに相当する。これを海岸線からの距離と考えると、場所によっては平野部にとどまらず、丘陵部や、山を超えた谷筋などにも達する。本当にそのように海岸から遠方の地域にまで海鳴りが聞こえるものだろうか。

波小僧伝承が伝わる範囲を郷土資料等で調べると、海岸沿いだけでなく、内陸の丘陵部にまで及んでいることがわかる。（図1）³。これらは伝承であって、それぞれの地域で本当に聞こえていたのか、今も聞こえるのかは定かではなかった。波小僧伝承を生み出した海鳴りとはいったいどのようなもので、どのあたりまで聞こえていたのだろうか。



図1 波小僧伝承の伝わる地域
出典：国土地理院「地理院地図 GSI Maps」
<https://maps.gsi.go.jp> から作成
（図4・5も同様）

本稿は、こうした遠州灘の海鳴り・波小僧の実態と現状を明らかにするため、2020年より、関西大学・大門信也、山梨県立大学・箕浦一哉との共同で行ってきた研究⁴から、海鳴りの聞こえた範囲等について、これまでの調査結果をもとに報告するものである。

なお本研究は、2020年度科学研究費、基礎研究・社会学関連の助成を受けて行われている共同研究の一部である。これまでに、波小僧伝承

に関する調査（大門 2022）、沿岸地域での住民との協働による観察調査（箕浦、大門、兼古、2021）などを行ってきたが、研究3年目にあたる今年度は、海鳴りの音響体としての特徴の把握と、その到達範囲や聞こえ方等について明らかにすべく調査を行ってきた。本報告はその成果の一部である。

2. 海鳴り・波小僧の実態調査

(1) 観察・聞き取り・情報募集調査の概要

遠州の海鳴り・波小僧の実態を明らかにするため以下の調査を行った。

- 1) 内陸地域住民への聞き取り調査
 - 2) HP 投稿フォームでの波音情報の公開募集
 - 3) 沿岸地域地元協力市民団体有志による観察調査
 - 4) 研究者チーム（筆者ら）による観察と録音
 - 5) 旧浜松市内 小中学校の校歌の歌詞の調査
- 5) の調査については次章で詳しく述べることにし、ここでは、1) ～ 4) の調査概要を示す。

1) の内陸聞き取り調査は、2022 年 3 月 15 日、5 月 22 日 23 日に、筆者らが浜松市北区引佐町で地域住民等に、海鳴りの聞こえに関して、口頭での聞き取りを実施した。調査エリアは、浜松市北区引佐町の三岳、井伊谷、伊平、四方浄、的場、渋川（青砥）の 6 区域で、合計 13 人に行った。

2) の HP による情報公開募集は、遠州灘の波音が高くなる夏から秋に合わせて、2022 年 7 月末に「遠州波小僧プロジェクト」ホームページ（<https://namikozo.com/>）を作成・公開し、その中で「みんなでつくろう波音マップ」のコーナーを設置、現在の波音についての情報を求める「2022 年夏編」と、過去の波音に関する記憶を集める「記憶編」の二つの投稿フォームから情報を募集した（図 2）。

3) の沿岸地域地元協力市民有志による観察調

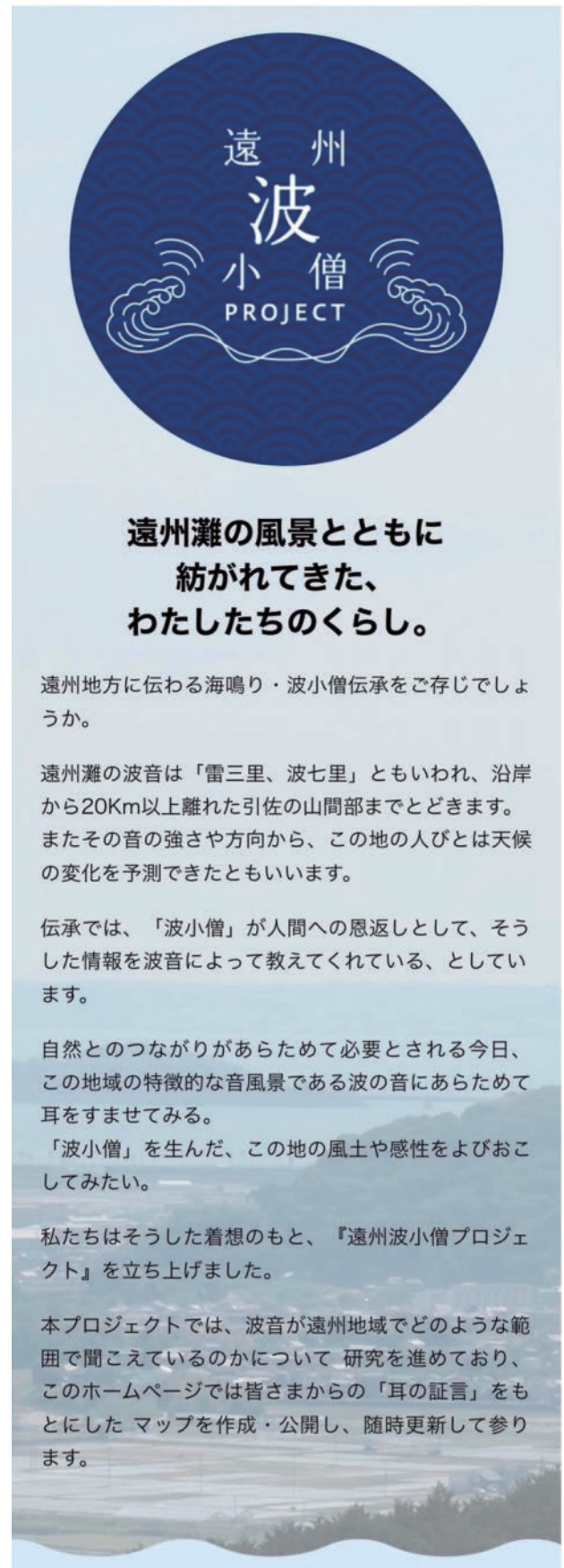


図 2 遠州波小僧プロジェクト HP（スマートフォン用）<https://namikozo.com/>



図3 遠州波小僧プロジェクト
～みんなでつくりよう波音マップ～HP

査は、浜松市内沿岸部の西区篠原地区を拠点に活動する郷土史グループ「浜風会」のメンバー有志 10 名程度が、研究者側からの提案に応じて、2020 年 11 月から 1 年間、主として沿岸部で行った波音の日常的な観察と記録であるが、本稿ではその中から、メンバーの一人が台風などの接近時に内陸地域まで出向いて観察した際の聴取報告を参照している（大門・箕浦・兼古、2022）。

4) の研究者チームによる観察・録音調査は、本研究の担い手である大門・箕浦・兼古の 3 名の研究者が、2020 年秋からこれまで、度々浜松を訪れ、2) の HP 投稿フォームによる情報公

開募集や、3) の沿岸地域地元協力市民団体有志による観察調査の結果から得られた定点で録音と観察調査を行ったものである。

(2) 調査結果

調査の結果、

1) の内陸部聞き取り調査では、海岸から 20～25km 圏内にある 3 つの地域（三岳、的場、渋川（青砥））で、延べ 7 人から「今も聞こえる」（1 名）、「かつては聞こえた」「聞こえたという話を聞いたことがある」（6 名）との証言を得た。

2) の HP による情報公開募集では、開始から約 1 ヶ月の間に「2022 年夏編」11 件、「記憶編」4 件の合わせて 15 件の市民からの投稿情報が寄せられ、沿岸部だけでなく、海岸から 5.5km、6km、約 10km 地点での波音の証言が得られた。

（大門・箕浦・兼古、前掲論文）。

3) の沿岸地域地元協力市民団体有志による観察調査の経緯と成果については、箕浦・大門・兼古（2021）、大門（2022）、大門・箕浦・兼古（2022）の論考において、地域市民との協働調査の意義や、台風接近時等の波音の変化の様子、音響的特性等について詳しく述べているが、沿岸地域（篠原地区）での観察結果が主であった。そのため、本稿では詳しくは触れないが、そのメンバーの一人が台風などの天候の悪化の際に、内陸部での観測を行い、海岸から 5.5km、13km、18km の地点で海鳴りを確認したとの報告がなされている（大門・箕浦・兼古、前掲論文）。

4) の研究者チームによる観察・録音調査では、2022 年 8 月 25 日 26 日に海岸から約 20km 地点にあたる引佐区三岳地区で海鳴りと思われる音を確認している（大門・箕浦・兼古、前掲論文）。

(3) 観察・聞き取り・情報募集調査のまとめ

これらの調査から、海鳴りの聴取確認地域

を示したものが図4である。波小僧の伝承と同様に、内陸奥深くまで聞こえている（かつて聞こえていた）ことが明らかとなった。また、海岸からの距離だけでなく、標高や地形も

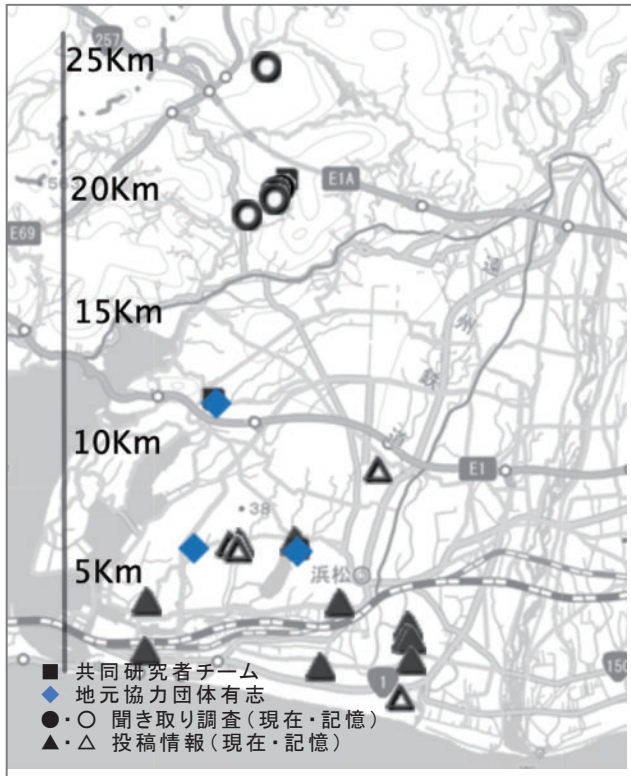


図4 波音の聞かれた地点（現在・記憶）
（※大門・箕浦・兼古，2022をもとに作成）

関係することが示唆された。

3. 校歌の歌詞の調査

(1) 耳の証人としての校歌

第2章の1) から4) で述べた、調査から、波音の聞こえた地点について、図4のような結果を得られたが、その補足と未調査地域の波音情報を得るために、浜松市内小中学校の校歌の各歌詞の中に「波音」「海鳴り」等に類する語句が含まれているかどうかを検証しその分布状況を調べた。これはサウンドスケープ研究の手法の一つであるイヤーフットネス（＝耳の証人）調査にあたるものである。校歌の歌詞の中に「波音」「海鳴り」等に類する語句への言及がある場合、少なくともその校歌が作成された時点で、その学校の地域にその音が聞こえていた

可能性が示唆される、と考えたからである。

調査対象は2005年の平成の合併以前の旧浜松市域の小中学校（小学校64校、中学校32校）計96校とし、調査の基礎資料として、たけのこ会編、1983、『浜松市小中学校校歌校訓集』（たけのこ会）を用いた。

(2) 調査の結果

対象校歌の歌詞中、小学校14校（廃校2校を含む）、中学校4校、計18校の校歌に「波音」「海鳴り」に類する表現が含まれていることがわかった。その分布は図5のようであった。

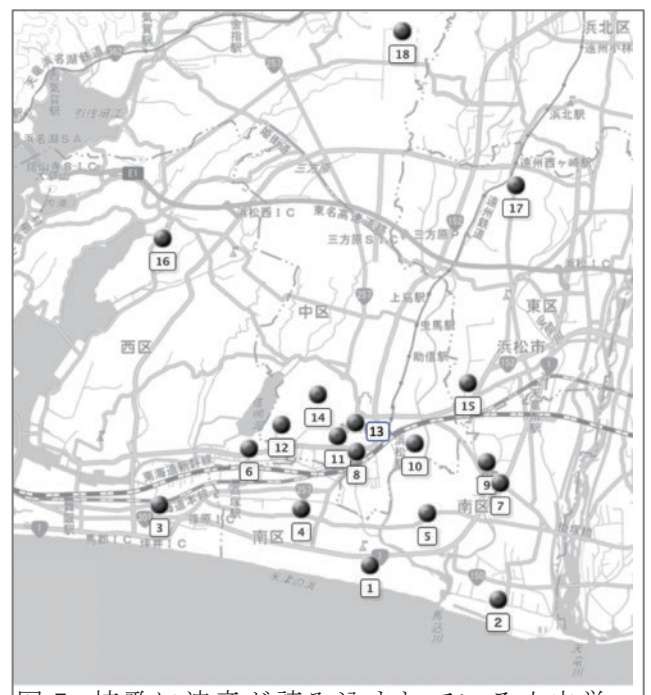


図5 校歌に波音が読み込まれている小中学校（旧浜松市域）番号は海岸に近い順（表1の学校名と対応）

図4の投稿、観察による波音の聞かれた地点と比較すると、近似の傾向が見て取れることから、校歌での波音への言及が（かつて）地域で実際に聞こえたであろう音環境を反映している可能性が考えられる。今後の海鳴り調査の地域選定の一つの指標になるともいえるだろう。

(3) 校歌の歌詞に見られる波音の様相

表1は校歌に見られる波音の記述内容をおおよそ、遠州灘に近い順に並べたものである。沿岸地域の校歌では、「波の調べ」「波の

表1 校歌に見られる波音の記述内容

1	砂丘小	波の調べに日は高く 希望の眉を上げながら
2	(旧) 遠州浜小	波の音から明けてゆく 歴史伝える松林
3	篠原小	遠州灘の浪の音 とどろと響く渚辺に
4	新津小	波も轟き潮香る 遠州灘を庭として
5	白脇小	遠州灘のとどろ浪 南に聞え朝日映ゆ
6	入野小	遠州灘のとどろ波 浜名へかよう潮風に
7	芳川小	明けゆく空に鳴る潮も 遥かな望み呼ぶところ
8	県居小	南に遠州灘の荒波を 海辺の松に高鳴るを 夕べに聞きて学ぶとき
9	南陽中	豊旗雲 朝日に匂い 遠州灘 潮騒聞こゆ
10	(旧) 高砂小	浜の松風高鳴りて 真砂に寄する波の音
11	西部中	遠州灘の潮騒の音 伊場に住みけん上古の民も 優れし学者 賀茂真淵も 心澄まして聞きけん響き 今し我らの胸にも響く
12	佐鳴台小	磯鳴る音の聞こえる わが学び舎に学び来て
13	西小	怒涛さかまく遠州の 波の響きに誓う今
14	蛸塚中	今ぞ世紀の鳴る汐に
15	蒲小	打ち寄せる遠州灘の波の音 正義の潮みなざりて
16	湖東中	輝く窓に黒潮の 遠き響きは 日に新た
17	中郡小	鳴る黒潮に胸もえて 三方おろしに励む日々
18	都田南小	遠州の潮鳴り高く この胸に望みは燃える

※番号は海岸に近い順(図5に対応)

音「浪の音」(1~3)といった言葉が用いられているが、浜からやや離れたエリアでは、「波も轟き」「とどろ波」(4~6)のように、「とどろく」という表現が使われるようになり、さらに離れると「空に鳴る潮」(7)、「高鳴る」(8)、「潮騒」(9、11)、「磯鳴る」(12)、さらに遠方では「世紀の鳴る汐」(14)、「遠き響き」(16)、「鳴る黒潮」(17)、「潮鳴り高く」(18)と、海から遠ざかるにつれて、言葉が変化していく様子が見てとれる。こうした歌詞の表現の差は、沿岸部の「波音」から内陸部の「海鳴り」へと聞こえ方が変化していく様子を思わせる。より詳細な分析が必要だろう。今後は、学校の開校時期・校歌の成立年代と波音の記述との関連等も調べていきたい。

4. 風景のアーカイブズとしての校歌

2016年の熊本地震の際、地元のコミュニティFM局である熊本シティエフエムsは、市内小学校の校歌をリクエストに応じて順次放送し、避難所生活を余儀なくされた市民を大いに励ましたと言われる(兼古、2017)。突然の震災で、ふるさとの風景、まち並みが損なわれ、日常が奪われた中で、地域の校歌が人々の心を繋いだことについて、同局役員の一人は「校歌には地

域の原風景が歌いこまれている」と語った⁶(兼古 2016)。北村らは、校歌は「子どもの頃に育った環境の象徴」であり「地域の「環境意識」を抽出し、風土の分析をするための素材として役に立つ」と指摘している(北村・浅見, 1996)。校歌には郷土の風景の記憶と意識が宿っているのである。

写真などに残りやすい視覚的な景觀に比べて、記録の少ない地域の音環境や聴覚的な記憶を今に伝えるメディアとして、校歌には風景のアーカイブズとしての可能性があるといえよう。世代を超えて歌い継がれる校歌は、成立時の地域の原風景や環境意識を記録し、今に伝えるとともに、校歌を歌うことを通して地域の風土を心に刻む効果もあり、地域の環境意識の形成にも寄与していることだろう。校歌のこうした側面は、音楽教育と環境教育、郷土教育をつなぐ可能性を示唆している。

5 結論とまとめ

遠州灘の波小僧伝承を育んだ海鳴り現象について、聞き取り調査、観察調査、情報公開募集、イヤーウィットネス調査等を組み合わせることで、沿岸部だけでなく、海岸から10km圏内や20kmを超える内陸部で聞かれていたことを含む、その実態の一端を明らかにすることができたことは、本研究の重要な成果である。

次に、今回の調査が、沿岸地域の地元協力団体との協働や、インターネット投稿フォームによる情報提供など、市民参加の形で実施できたことが第二の成果である。

1996年に環境庁の「残したい日本の音風景100」に選定され、さらに2013年には「浜松市音・かおり・光資源百選」にも認定された「波小僧」現象が、その呼称や物語のみが流布し、実態や体験の伴わない、いわば空疎な物語として、観光資源化しつつある現状がある中で、その聞こえ方の実相を明らかにすることは、波小

僧伝承が本来内包していた、人々と地域の音風景との豊かな関係性に光を当てることであり、こうした調査を、沿岸地域地元協力団体との協働やインターネット投稿フォームにより、市民とともに行うことができたことは、地域の音環境への気づきを促し、地域住民が地域の音環境との新たな関係性を構築し、紡ぎなおす機会としても重要であった。「この活動を通じて、参加メンバーはさまざまな気づきを得ていた。調査対象である波音について認識を新たにし」「海と人びとの関わりについて再確認する機会になっていた。」(箕浦・大門・兼古、2021)からである。

その意味において、このような協働調査それ自体が「気づき」を伴う環境教育的プロジェクトであり、サウンドエデュケーション、広義の音楽教育とのかとしての側面を持っているといえる。こうした課題については、地元小学校等との連携も視野に、今後の本研究のテーマのひとつとして、さらに深めて行きたい。

本研究は JSPS 科研費 20K02174 の助成を受けた共同研究の一部である。ご協力をいただいた、地元の住民団体の皆様、浜松市民の皆様、波小僧伝承の地点の情報等をご提供いただいた小菅由加里氏に感謝申

し上げます。

参考文献

- 井上武士 (1933) .新訂尋常小学唱歌の解説と其取扱 [尋三] , 明治図書, pp.245-257
- 兼古勝史 (2016) .地域メディア最前線 Vol.53 ~被災地に響いた校歌~熊本シティエフエム, 月刊 B-maga, 2016.8 月号, (株)サテマガ Bi, p.73
- 兼古勝史 (2017) .熊本地震におけるコミュニティラジオ局の対応ー校歌のリクエスト放送の事例に見る音響共同体の位相ー, 共栄大学教育学部研究紀要, 第1号, pp.61-72
- 北村真一・浅見雅子 (1996) .校歌-心の原風景, 学文社, p.3, p.213
- 小山枯榮 編著 (1942/1995) .新版 遠江の伝説, 羽衣出版, pp.257-260
- 静岡縣女子師範学校郷土研究會 編 (1934) .静岡縣傳説昔話集, 羽衣出版, pp.252-254
- 鈴木暹・大嶋善孝 (1994) .東海道と伝説(RomanKaido Tokaido. 〈8〉), 静岡新聞社, pp.201-203
- 大門 (2022) .遠州灘の海鳴り／波小僧伝承と前浜の記憶, 関西大学社会学部紀要, 53(2), pp.23-48
- 大門・箕浦・兼古 (2022) . 遠州灘海岸における「海鳴り」の音響体的特徴の考察, 日本サウンドスケープ協会 2022 年度秋季研究発表会論文集, pp.33-42
- たけのこの会編 (1983) .浜松市小中学校校歌校訓集, たけのこの会
- 兵藤庄右衛門 (藤長庚) 編 (1803) .遠江古蹟図会
- 箕浦・大門・兼古 (2021) .市民との協働によるサウンドスケープ調査, 日本サウンドスケープ協会 2021 年度秋季研究発表会論文集, pp.7-12

註

- 1 遠州灘の海鳴り・波小僧伝承の分類と考察については、大門の論考 (大門、2021) に詳しい。
- 2 例えば、鳥越は、環境庁による「残したい日本の音風景 100 選」公募に「遠州灘の波の音」を応募した浜松市民の書いた応募申込書の記述としてこの諺を伝えている。(鳥越、2008)
- 3 波小僧伝承の伝わる場所については、『新版遠江の伝説』『遠州伝説集』『続遠州伝説集』『Tokaodo.8』『遠江国怪奇不思議談』『しずしおか文化』『引佐町史上巻』『引佐町物語』『静岡新聞日曜版』『いわとみ No.167』『蕉園渉筆』『浜名郡五島村郷土史』『遠州浜』などを参照した。地点の特定にくいものはその地区の代表箇所 (役場、協働センター等) とした。また旧浜名郡北部・南部など広域で範囲の特定できないものは除外した。:
- 4 イヤーウィットネス (耳の証人) :ここでは、「音風景の情報」を記した記録物」の意味で用いる
- 5 震災直後は臨時災害放送局として放送
- 6 熊本シティエフエムの震災当時の営業部長が筆者の取材に対して述べた言葉